

第一三章 方言

第一節 位置づけと地域差

種子島で話されている方言は、伝統的な方言区画論では九州方言のうちの薩隅方言（鹿児島県で話される方言）に分類される（東條 一九五四）。しかし、イ段、ウ段で終わる語がつかまる音になる「入声化」という現象が見られないなど、薩隅方言的な特徴が薄いこと①や形容詞のカ語尾や逆接（〜けど）の接続助詞に「バッテ」を使う、「〜しなれば」という表現に「センバ」を使うなど、長崎や熊本などで話される肥筑方言的な特徴が多分に見られること②から、種子島方言の従来の位置づけを見

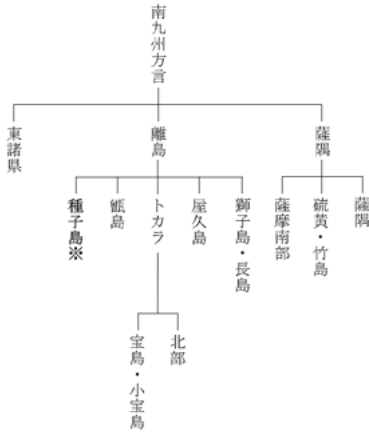


図8-34 種子島方言の位置づけ (植村2001)

直す研究もある。植村（二〇〇一）は種子島方言を図8-34のように位置づけている。本市で話されている方言も、中種子町・南種

子町で話されている方言も、種子島方言のうちの一つとして位置づけられるが、両者は接続助詞「テ、デ」に現れる音声に顕著な違いがある。一般に本市では「アケテ（開けて）」「ノーデ（飲んで）」、中種子町以南では「アケチエ」「ノーヂエ」と発音され、この違いについて島民も強く意識している。

本市内の地域差については、源氏の追手伝説が残る立山や見和氏、禰寝氏とつながりがある現和の言葉が変わっているとよく言われるが、大まかには「市内の東西で言葉が違う」と市民には意識されている。第二、三節に示すようにアクセントの違いもあるが、ここでは語彙の差異を紹介する。例えば、「サンゴ」を西海岸の多くの集落では「ガセ」と呼ぶのに対し、東海岸の多くの集落では「インバ」と呼ぶ。

図8-35は、川などでよく見られる小型のハゼ類を何と呼ぶかを地図上にプロットしたものである。

市内広域で「ツ克蘭ピョー」のように呼ばれているが、国上や安納など東部では「ウンダラー」のように呼ばれている。伊関に「ドンコ」という語形が固まって見られるのは特徴的である。

図8-36は、ツルソバという植物を何と呼ぶかを地図上にプロットしたものである。イモーメ、イモーメン、イポーベンなど多くの語形が観察されるが、本市西南端の住吉深川では「イーゴンメ」と最初の音節が長く伸びる。植村（二〇〇一）によれば本市南部に接する中種子町でも「イーボンベ」と最初の音



図8-36 ツルソバの方言差



図8-35 ハゼ類の方言差

節が伸びており、興味深い。古田二本松では「シューメ」であるが、これは移住者の言語によるものだろうか。本市には明治以降の移住によってできた集落が多数あり、東西の差だけでなく移住集落と本市在来集落との方言差もある。例えば、国上野木平集落の高年齢は、「あなた」のことを「アッコ」と言うが、これは甌島手打から移住してきた先人から受け継がれた言葉である。

第二節 研究と継承活動の歴史

本市で話されている方言の研究は、鯨島（一九三三）や井上（一九三三）による語彙の収集に始まる。文法・音韻に関しては、上村（一九五九）が現時点で最も詳細な研究である。アクセントについては、西之表地区の調査結果を平山（一九六七）や上村（一九七〇）が報告しているが、本市内であっても集落によって大きな違いがあることが近年明らかとなってきた（木部 二〇〇〇、荒河 二〇一五、荒河 二〇二三）。文表現方法に関しては、瀬戸口修のフィールドワークによる一連の研究がある（瀬戸口 二〇〇一）。

また、前節で本市内の移住集落について述べたが、それら移住集落で話されている諸方言の語彙、音声、文法を体系的にまとめた研究は全くないため、早急な調査が望まれる。

マスメディアの普及や核家族化の進行により、本市においても若年層が方言を話す場面は非常に少なくなってきた。



ぢろの会による「わらべうた」

そのような状況を憂えて、本市の子どもたちに方言や昔話を継承することを目的として、ボランティアグループ「種子島の語り部ぢろの会」が活動を行っている。児童クラブや小学校を訪問しての民話の語りや民話集、方言を使ったグッズの製作等、精力的な取組を続けている。西之表市教育委員会は各校区の方言収集を行い、平成十二年（一九九九）に方言集を発行した。今後も、市民と行政が一体となって本市で話されている方言の記録調査と継承活動を続けていくことが重要である。

第三節 音 韻

本市で話されている方言は、前述したように鹿児島本土に見られる入声化というつまる音がなく、他地域の人にとっては聞き取りやすいと言われる（上村 一九五九）。鹿児島本土で「アイ(ɛi)」の母音連続は「エ(ɛ)」に変化するが、本市では「アー(ɛ̄)」となり、例えば「灰」は「ハー」と発音される。

九州でよく見られる、いわゆる開合の区別はない。

九州でよく見られる、いわゆる開合の区別はない。「awa」という音の連続は「オー(ō)」に変化することがある。

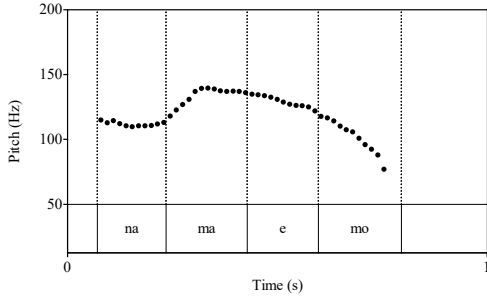
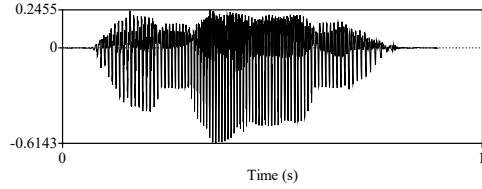
前述の住吉深川集落は、「フカゴ」と発音される。ア行で終わる名詞に主題の「ワ」が後続した場合も、この変化が適用される。（例：コン ハノー キレーカナー（この花は綺麗だね）バ行、マ行、ワ行動詞のテ形、タ形（過去）は、ウ音便となる。「飛んで」は「トーデ」、「買った」は「コータ」と発音される。

カ行、ガ行、サ行動詞のテ形、タ形（過去）は、イ音便となる。「書いて」は「カーテ」、「貸して」は「カITE」となり、「アイ(ɛi)」が「アー(ɛ̄)」となる母音連続の規則によってこれも「カーテ」となる。

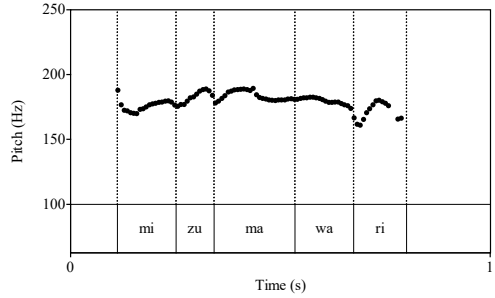
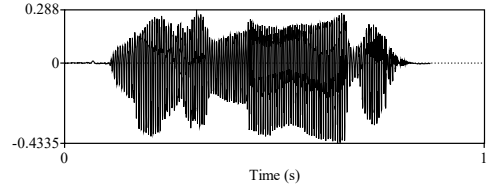
アクセント

かつては、単語の意味をアクセントで区別しない無アクセントであるという説（上村 一九七〇）とアクセントの区別が二

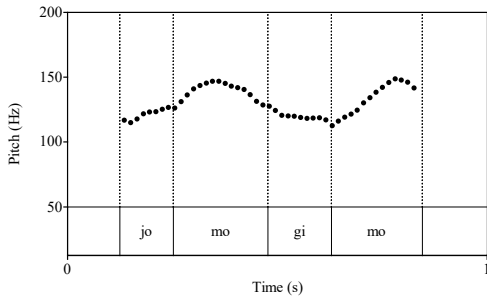
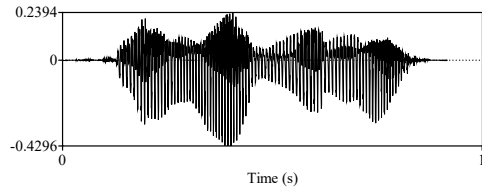
第3節 音 韻



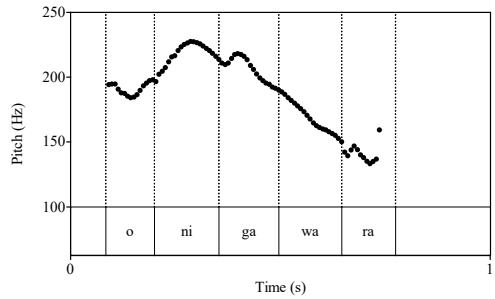
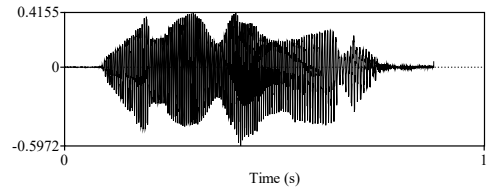
A型「名前も」(ナ[マ]エモ)



A型「水回り」(ミ[ズマワリ])



B型「蓬も」(ヨ[モ]ギ[モ])



B型「鬼瓦」(オ[ニ]ガワラ)

図8-38 伊関浜脇方言「言い切り形」のアクセント

図8-37 西之表方言のアクセント

パターンしかない二型アクセントであるという説(平山 一九六七)とで意見が対立していたが、木部(二〇〇〇)によれば本市の中でも西之表と住吉の方言は二型アクセントであり、二地区は同様の体系を持つ。以下、慣例に従って二つの型のうち一方をA型、もう片方をB型と呼ぶ。西之表方言のA型は、文節内に顕著な下がり目のない型であり、B型は前から二拍目が高く、最終拍に向かって下降する型である(荒河 二〇一五)。

一方、本市東部で話されている伊関浜脇方言のアクセントの仕組みは、西之表や住吉の方言とは全く異なる(荒河 二〇一五)。伊関浜脇方言のA型は前から

二拍目が高く、そこから最終拍に向かって下降する。それに対してB型は、「言い切り形」と「接続形」とで音調型が異なるという特徴がある。「言い切り形」とは、他の文節が後ろに続かない場合に現れる音調型で、「接続形」とは他の文節が後ろに続く場合の音調型である。伊関浜脇方言のB型の接続形は、A型の音調型と類似し、前から二拍目が高く、その後下降する音調型であるのに対し、言い切り形は、二拍目に加えて最終拍も高くなる、いわゆる「重起伏調」の型である。

また、本市南東部で話されている安城下之町方言の高年層話者の発話には、屋久島で話されている諸方言と類似した音調型が観察されることが指摘されている（荒河 二〇二三）。

今後も本市各集落の詳細なアクセント調査を行うことで、各方言のアクセントの仕組みが明らかとなる。それらを比較することで、本市で話されている諸方言のアクセントがどのようにして生まれたのか、その歴史的变化を明らかにすることができらるだろう。

第四節 文法

本市で話されている方言は、動詞の旧下二段活用が残存や「ゴタル（〜のようだ、〜したい）」、準体助詞の「ト（の）」など九州方言に広く見られる特徴を持つ。それらに加え、薩隅方言的な「〜ガナル（〜できる）」、進行を表す「〜カタ（〜している）」なども使われる。係り結び（〜こそ〜けれ）の残存など、その他にも文法的に興味深いことが多数ある。動詞・形容詞の変化については、上村（一九五九）が詳しいのでそちらに譲り、紙幅の都合で本節では文法事項のごく一部を紹介するにとどめる。

代名詞

一人称は「オイ」や「ドモ」、「ドン」。二人称は「オゼ」、「ワー」。三人称は「ヌシ」や「アイ」。見下した言い方に「ウナ（おまえ）」がある。複数はそれぞれ「〜タチ」や「〜ナンド」などを付ける。

格助詞

主格は「ガ」であるが、主語が二人称のときは「ノ」が使われやすい（例…ワーノ セーヨ（お前がしろよ））。

また、目上の人が主語のときもノが好まれる（例…センターノ ワセタロー（先生が来られたよ））。

属格は「ノ、ン」が使われるが、人の所属物を表すときは「ガ」が優先して使われる(例：オイガト(私のもの))。

対格は「オ、オバ」で、肥筑方言のように「バ」は使わない。与格は「イ、ニ」。東京では「ガ」が使われる状況で与格が現れることがある(例：カミナリー オソシカ(雷が怖い)、インニ スカン(犬が好きじゃない))。

移動先の場所を表す助詞として「サナー」もある。国上や伊関では「サマー」(例：マチサナー イク(町に行く))。

動作の進行、完了を表すには「オル」、「トル」が使われる(例：カキオイ(今書いている)、カートイ(もう書いている))。

敬語については、「申す言葉」と呼ばれる、「モース」を付加する表現が多用されていたが、現在消滅の危機に瀕している(例：オジャリモーセ(いらつしやいませ))。

「ル、ラル」を用いる方法もある(例：ドケー イカット?(どこに行きなさるの?))。

また、肥筑方言で広く尊敬の意を表す「ス、ラス」を動詞に付けると、本市では相手を見下した表現となる(例：アンター ナイモ サツサンヨースノ(あいつは何もしないくせに))。

原因・理由の接続助詞は「カラ」である(例：オーアメヤカラ フネガ デランヤッタ(大雨だから船が出なかった))。

仮定の接続助詞には「ギリ」を述語のタ形に付ける(例：ソケー イタギリ イケンドー(そこに行ったらいけないよ))。

よ))。

人から聞いた情報や自分で見た情報に基づいて発言するとき、「ケンデ」や「ゲーナー」を付ける(例：ソージシタケンデ(掃除したみたいで)、アメヤゲーナーナ(雨らしいね))。

「くじゃないかな?」と相手の意向を確認するとき、「ナツカ」を付ける(例：イケンナツカ?(いけないんじゃない?))。

新しい発見があったときや納得したとき、「ケリヤー」を付ける。(例：コケー アツタケリヤー(ここにあったのか!))

勧誘・提案は、動詞の意志形に「ワイ」を付ける(例：ショーワイ(しようよ))。

肯定の返事は「オヨ」、否定の返事は「ンニヤ」。驚いたときは「アバ」と言うが、本市南部の中割では、中種子町以南でよく聞かれる「キエツ」も使われるようである。